社會構成史体系〔第二部　東洋社會構成の發展〕

東南アジア社會の一類型

——インドネシア社會構成史——

小林良正

日本評論社版

東南アジア社會の一類型

―インドネシア社會構成史―

小林良正

目次

序　對象と課題……七
A　ヒンヅー政權……一〇
〔一〕ヒンヅー渡來以前の東インド社會……一〇
〔二〕ヒンヅー渡來と西部ジャワ……一三
〔三〕ヒンヅー渡來と中部ジャワ……一六
(1)ヒンヅー王國の隆替……一六
(2)佛教王國――シャイレンドラ王朝……一八
〔四〕ヒンヅー渡來と東部ジャワ――モジョパイト王朝……二一
〔五〕ヒンヅー・ジャワの社會經濟構成……二四
(1)社會構成……二四
(2)產業發達段階……二八
B　イスラム政權……三三
〔六〕イスラム教の渡來・傳播……三三

〔七〕マタラムとバンタム……三六
〔八〕イスラム・ジャワの社會經濟構成……三九

C　オランダ政權（一）東インド會社の支配……四五

〔九〕オランダ進出前史……四五
〔一〇〕オランダの進出……四八
〔一一〕ポルトガル、エスパニヤ、イギリスに對する鬪爭……五一
〔一二〕マタラム反擊……五五
〔一三〕十七世紀の領土擴大……五九
〔一四〕十八世紀の領土擴大……六三
〔一五〕間接統治・經營……六六
〔一六〕VOCの沒落……七五

D　オランダ政權（二）中間支配……七六

〔一七〕デンデルス……七六
〔一八〕ラフルズ……七九

E　オランダ政權（三）一八一五―三〇年……八五

〔一九〕カペレン……八五
〔二〇〕デュ・ビュス……九三
F　オランダ政權（四）強制栽培制度……九六
〔二一〕ファン・デン・ボス……九六
〔二二〕強制栽培の理論と實態……九九
〔二三〕一八三〇―五〇年……一〇五
〔二四〕一八五四年の「統治令」……一一〇
〔二五〕ファン・ド・ブット……一一五
〔二六〕「純益政策」の總決算……一一五
〔二七〕私的農企業の擡頭……一一七
G　オランダ政權（五）外來資本の導入……一二一
〔二八〕「農業法」と「國有地宣言」……一二一
〔二九〕資本家的農企業の導入と外領……一二八
〔三〇〕資本の本格的導入のための準備……一三三
〔三一〕十九世紀末の恐慌……一三八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

〔三二〕「道義的政策」……一四五
〔三三〕外來資本の定着形態……一五一
結　言　民族プロレタリアート對帝國主義……一五八

序　對象と課題

古來、「後部インド」、すなわち今日のコチンシナ、カンボジャおよびアンナンの地に定住していた民族は、いつとも、さだかに判定し難い時代において、一定の原因によつて、その故郷を押し出され、北は臺灣から、南はオーストラリア、東はイースター島から、西はマダガスカル島にいたるところの太平洋およびインド洋に亘る海上の島々に、散開・移住するにいたつたと云われる(註1)。これが、今日、「インドネシア」(Indonesiers, Indonesians)と呼ばれる民族であり、そしてその中樞的部分は、近世以來、今日にいたるまで、オランダの統治に服し、したがつて蘭領東インドまたは蘭印(Nederlardsch-Indië, Dutch East-Indies)の稱呼をもつて呼ばれ、その廣がりは、北はハルマヘラ群島より、南はチモール島、東はニューギニア西半より、西はスマトラ島に及んでいる。その東西五〇〇〇粁、南北二〇〇〇粁に及ぶ空間に散在するところの大小無數の島々は、「(東)インド諸島」(Insulinde)または「マレイ列島」(Malay Archipelago)と總稱されているが、その總面積は、一九〇萬平方粁、實にオランダ本國の六〇倍に及んでおり、最大なものは、ボルネオ(蘭領部分のみで五四萬平方粁)で、スマトラ島(四六萬平方粁)、ニューギニア(蘭領部分四一万平方粁)、セレベス島(一九萬平方粁)およびジャワ・マヅラ(一三萬平方粁)が、これに續いている(註2)。有名な反蘭作家、ドウェス・デッケル(Douwes Dekker、筆名、Multatuli, 1820—87)が、その『マクス・ハーフェラール』において、この東インド諸島を、「赤道のまわりに撒き散らされたエメラルドの首飾」と形

容したことは、人の知るところである。

（註1）　Mevr. W. Fruin-Mees : Geschiednis van Java——松岡靜雄譯補『爪哇史』一頁以下參照。

（註2）　Indisch Verslag, 1941 による。

この東インド諸島の島々の中で、ジャワ・マヅラは、ほゞ諸島の中心に位置していること、地味が豐沃で、水田米作に適していたこと、かつ東西交通の要衝を占めていたことなどによつて、つとに諸島内における中心的地位を獲得し、現に近世以降におけるオランダの統治に當つても、このジャワ・マヅラを據點とし、その他の地方を、「外領」（Buitengewesten）として區別した。その結果、ジャワ・マヅラと外領との間の社會的、政治的、經濟的差異は、いよいよ顯現し、いまこれを、人口の分布・密度について、一九三〇年の數字に徵してみても、次表の示すごとく、極めて顯著なものを見出すのである。

東インドの人口密度

	面積（平方粁）	比率	人口（人）	比率	平方粁當の人（人）
ジャワ・マヅラ	一三二、一七四	七%	四一、七一八、三六四	六九%	三一六
外領	一、七七二、一七一	九三	一九、〇〇八、八六九	三一	一一
計	一、九〇四、三四五	一〇〇	六〇、七二七、二三三	一〇〇	三四

〔備考〕 Indisch Verslag, 1941 によつて作成。

これによつてみると、ジャワ・マヅラは、土地面積において、全蘭領東インド諸島の七%を占めているにかゝわらず、

全人口の六九%を包容し、從つてその人口密度は、一平方粁當り、外領の僅か一一人に對し、實に三一八人と云う世界有數の記錄を示している。

本稿において、限られた紙幅をもつて、東インド社會構成の變遷を辿るに當り、筆者は、如上の事情に基ずき、主として主要關心を、ジャワ・マヅラに置き、外領の諸事情は、必要の限度において關說することゝせざるをえない。

凡ての社會構成は、その歷史的生成の成果であり、從つて當該の社會構成の具體的把握は、その歷史的生成・發展のうちに求めらるべきものである。いま、われわれの前に置かれている東インドの社會構成の場合にも、このことは、當然、當てはまるのみでなく、東インドの場合、歷史的生成・發展のプロセスが、特に主要な意義を持つ諸事情は、行論のうちに示されるであろう。こう云う理由のもとに、本稿は、かゝる視角から極めて簡結せる形において、東インド社會構成の生成・發展を跡づけることを、課題としたい。

A　ヒンヅー政權

〔一〕　ヒンヅー渡來以前の東インド社會

前述のごとく、今日のインドネシア民族の祖先が、その後部インドの故土を押し出され、廣い海洋上の島々に散開・移住するにいたつた時期は不明であるが、ともかく、相當長い期間に亘つて、小グループをなして、三々五々、押し出され、そのおのおのが、適當な島を求めて、そこに定住するにいたつたものと想像され、自來、海洋によつて隔絶された孤立的生活の條件のもとで、長年月の間に、經濟的、社會的、文化的な地方的偏差を生じ、やがて無數の種族を醸出したものとみられている(註)。ジャワ・マヅラに渡來せるインドネシア民族も、少くともそれが、歴史時代に登場して來たときには、すでに三つの種族によつて構成されていたのであり、そしてこの三種族は、今日のジャワ・マヅラにおいても、明かに區別しうるものである。

(註)　フロイン・メース、前掲譯書、二―三頁參照。

右三種族のうち、第一群は、西部ジャワに定住せるもので、後にヒンヅー人により、「スンダ族」と呼ばれるに至つたものであるが、後述のごとく、ヒンヅー文化の影響を蒙ることが、比較的少かつただけ、インドネシア的傳統を、より多く濃厚に殘している。第二群は、中部ジャワの廣汎な地域を占據し、自來、東部ジャワにまで膨脹せるもので、「ジャワ族」と呼ばれているが、ヒンヅー文化の影響を、最も長く、かつまともに受けた種族である。最後に第三群

は、東部ジャワ、今日では、主としてマツラ島を中心として定住し、從つて「マツラ族」と總稱されているもので、マツラ島は、ヒンツー文化の影響を受けることが、最も少かつた。一九三〇年現在、ジャワ總人口中に占める、これら三種族の比重は、次のようになつている。

種族別ジャワ人口

	人口	比率 %
スンダ人	八、四六六、三二七	二一
ジャワ人	二六、八四一、四七四	六六
マツラ人	四、二八九、八五九	一一
その他	一、一八六、八六六	二
計	四〇、七八四、五二六	一〇〇

〔備考〕前掲 Indisch Verslag, 1941 によつて作成。

これによると、今日、ジャワ島の中部より東部にかけて定住しているジャワ人は、ジャワ・マツラ全人口の六六%、すなわち三分の二を占めており、これとマツラ人との關係は、古來、比較的「友誼的」であつたと想像され(註1)、從つて東部ジャワ一帶に亘つて、兩種族間の混血の事實が指摘されている(註2)。ところが、ジャワ人と西部のスンダ人との關係は、「反目」的であり、テガル附近を流れるチバマリ川とその南方、バニュマス州に横わる沼澤地帶、すなわちだいたい東經一〇九度の線によつて、自然的にも限界づけられ、この線の東西に亘つて、兩種族の文化は、例えば

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

言語についてみても、以東はジャワ語、以西はスンダ語と云うふうに對立し、今日にまで及んでいる(註3)。

(註1)　フロイン・メース、前掲譯書、四頁參照。
(註2)　デ・クレルク、Geschiednis van Nederlandsch Indië 南方調査會譯書、三一頁參照。
(註3)　フロイン・メース、前掲譯書、五頁參照。

當時における、これら種族の產業發達・文化段階についても、的確に知ることはできないが、フロイン・メース夫人によると、そのジャワ渡來に際し、故土、後部インドの產業發達・文化段階が、こゝに齎されたことは當然である。ともかく當時の遺物と見られる出土品が、專ら石器なる點より、なお石器時代にあつたことは疑いなく、のち鐵器時代に入つても、なお石器が、多く用いられたと云う(註4)。こゝに、非常に注目すべきことは、インドネシア民族が、當時すでに、水田米作の技術を知つていたこと(註5)、そしてジャワが、そのために、絕好の條件を具備していたことであり、このことは、前述のごとく、ジャワ・マツラをして、東インド諸島の中心地たらしめた諸原因中の一つを成したこと(註6)、疑うべくもない。西歷紀元前後、ジャワ島は、ヒンツー人の間に、Java dwipa として知られていたが、フロイン・メース夫人は、これを、「米の國」の意味に解している(註7)。

(註4)　フロイン・メース、前掲譯書、五頁參照。
(註5)　同前、九頁參照。
(註6)　Farnivall : Netherlands India, a study of Plural Economy, 南太平洋研究會譯書、一五頁參照。
(註7)　フロイン・メース、前掲譯書、一三―一四頁「註」參照。

なおこの時代のインドネシア民族の技術的水準について注意すべき點は、その海上移住が、相當發達せる航海技術を前提とすること(註8)、また水田米作が、家畜飼育と結びついていたことであり(註9)、ことに後者は、日本の原始農業との對照において、極めて興味ある點である。總じて西歴紀元當初のジャワの社會は、すでに「開化の域」に到達せるものとみられ(註10)、例えば當時の地理學者、プトレメウスは、一五〇年頃、ジャワを、「黄金の國」と呼んだと傳えられているが(註11)、この事實は、少くとも冶金技術の一定の水準を前提とするものと考えられる。

(註8) フロイン・メース、前掲譯書、一頁參照。
(註9) 同前、九頁參照。
(註10) 同前、一一頁參照。
(註11) 同前、一三頁參照。

〔二〕 ヒンヅー渡來と西部ジャワ

だいたい以上に述べたような水準にあつたところのジャワのインドネシア社會は、西歴紀元前にいたり、前部インドの南部よりするヒンヅー人の渡來を迎えたのである。この渡來の樣式については、今までのところ、二つの說が行われているようである。例えばフロイン・メース夫人は、かつて後部インドにおいて、今日のインドネシア民族を、東インド諸島へ押し出したと同樣の事情が、當時、前部インドに發生し、この壓力によつて、ヒンヅー人が、その故國を押し出されたものとみるようである(註1)。しかし當時、そうした形の「民族移動」が行われ、その結果、ジャワ

社會が、大量のヒンツー移民を迎えたとする說は、いさゝか根據薄弱のようである(註2)。當時、前部インドと中國(漢朝)との間の海上交通は、ジャワを、不可缺な補給地として行われたものとみられているが(註3)、果して然らば、インド商人、中國商人等の來航をみたことは當然であり、しかも當のジャワが、上述のごとく、「米の國」であり、「黃金の國」であれば、これらの商人が、漸次、この地に居留するようになることも、自然の成行きであろう。ファーニバルは、「この居留地が、植民地や小王國に發達した」とみている(註4)。

(註1)　フロイン・メース、前揭譯書、一四頁參照。
(註2)　東亞經濟調査局『南洋叢書』――「蘭領東印度篇」三一頁參照。
(註3)　フロイン・メース、前揭譯書、一六頁參照。
(註4)　ファーニバル、前揭譯書、二〇頁參照。

さてこのヒンツー人の渡來が、主としてジャワのいずれの地點において行われたかと云うことも、的確には判明しないが、だいたい西部と想定されている(註5)。『後漢書』――「南蠻列傳」によると、西歷一三二年、ジャワのデワワルマン王なるものが、中國に、使節を派遣しているが(註6)、その所在は明かでない。その後、二―三世紀を經て、西曆四―五世紀の頃と推定される碑文が、西部ジャワで發見されたが、これによると、當時、西部ジャワには、ヒンツー系の「タルマ王國」なるものがあり、プルナワルマン王なるものが君臨していたことは確實である(註7)。フロイン・メース夫人は、前記二世紀當時のデワワルマンと云い、このプルナワルマンと云い、「ワルマン」と云う語尾を共通にしているところから、同一王統に屬するものと推斷し、從つてヒンツー王國・タルマをもつて、すでに西曆二世

紀このかた、西部ジャワに存在したものと推定している（註8）。

（註5）フロイン・メース、前掲譯書、一四頁參照。
（註6）同前。
（註7）同前、一五頁參照。
（註8）同前。

四一四年、インド巡禮の歸途、この地に寄港せる中國僧、法顯の記述について、五世紀當時のタルマ國の社會構成を窺つてみると、「多數の外道」（スンダ人）と「多數のバラモン」（ヒンヅー人）とによつて構成せられ、佛教徒は、「ほとんど皆無」だつたようである（註9）。こうみてくると、タルマ國なるものが、土着のスンダ人に對する外來のヒンヅー人の支配機構であり、その頂上に立つものが、ヒンヅー國王であつたことが判る。そしてこの場合、ヒンヅー支配は、基底におけるスンダ社會そのものに觸れず、たゞその上に、ホンフレイブの言葉を借りれば、「上部構造」として被されたに過ぎず（註10）、從つてヒンヅーの支配は、少くとも西部ジャワ（スンダ社會）に對して、さまでラヂカルな影響を持たなかつたのである（註11）。しかもその後におけるタルマ國の消息は、歴史上から、全く絶えている。

（註9）フロイン・メース、前掲譯書、一六頁參照。
（註10）Gonggrijp : Schets eener Economische Geschiednis van Nederlandsch Indië ——岩隈譯「インドネシア經濟史概說」九—一〇頁參照。
（註11）クレルク、前掲譯書、四〇頁參照。

その後、西部ジャワが、歴史上に表れるのは、十一世紀のことで、この地方、チバダク附近に、「スンダ國」なるものがあり、ビシヌ教徒の國王を戴いたむねが傳えられているが（註12）、十二―十三世紀になると、このスンダ國が、パレンバン（シュリ・ビジャヤ國）に隷屬していたことが報ぜられている（註13）。降つて十四世紀になると、パジャジャラン國のラツー・プラーナ王が、新都、パクアン（バイテンゾルフ）を建設したことが報ぜられているが（註14）、後述のごとく、一三五七年、モジョパイト國と戰つて敗れたのは、この王である（註15）。一五〇〇年頃、この國の版圖は、北は、チタルム河よりチカンデ河に及び、南は、プラブアン・ラツーよりパモタン山脈に達したもののようである（註16）。

（註12）　フロイン・メース、前掲譯書、一七六頁參照。
（註13）　同前、一七七頁參照。
（註14）　同前、一七九―八〇頁參照。
（註15）　本書、〔四〕參照。
（註16）　フロイン・メース、前掲譯書、一八一頁參照。

〔三〕　ヒンツー渡來と中部ジャワ

1　ヒンツー王國の隆替

かつて西部ジャワにおけるタルマ國の建設と同樣のコースをもつて、六世紀の初頭、中部ジャワにおいても、前部

インドのカリンガ地方出身とおぼしきヒンヅー人によつて、「カリンガ國」が建設されるにいたつた（註1）。このカリンガ國の事情については、中國の『唐書蕃夷傳』などに散見するのみで、ジャワ自體に據るべき典據がなく、從つてその後の消息についても、餘り多くを知ることができない。この地方における最古の碑文としては、マゲラン地方で發見されたところの七二三年の碑文がある。それは、サンジャヤ王の建立にかゝり、その父、サンナハ王の事蹟を記しているが、國名は不明であり、また前記カリンガ國との關係も判明しない。たゞこの王統が、さまで遠からざる過去において、前部インドより渡來せるヒンヅー人（シバ教徒）であることを證明している（註2）。

（註1）　フロイン・メース、前掲譯書、二三―四頁參照。

（註2）　同前、二五―六頁、二七―八頁參照。

同時代の一スンダ文記錄は、サンジャヤ王の征討史を傳えているが、これによると、まず東部ジャワを征服せるのち、バリ島、ビマ島を服屬し、さらに轉じて、スマトラ島のメラユ地方（ジャンビ）より、遠くマレー半島を經て、後部インドにまで遠征し、また中國軍とも交戰している。ところが、その後における同王統の事蹟は、はなはだ不明瞭であるばかりでなく、八世紀のなかばにおいて、中部ジャワは、遂にスマトラのシュリ・ビジャヤ國の支配を受けるにいたつたものゝごとくである（註3）。

（註3）　フロイン・メース、前掲譯書、二六頁參照。

こゝでわれわれは、當時のスマトラにおける事情に、瞥見を與えておかなければならない。すなわちこゝでも、すでに早くより、シュリ・ビジャヤと云うヒンヅー王國が建設され、五世紀の頃には、パレンバンを中心とする地域に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook